

濱 敏弘 (監修)

青山 剛, 東加奈子, 川上和宜, 宮田広樹 (編)

がん化学療法レジメン管理マニュアル

安藤雄一

名大病院教授・化学療法部

全国の病院で外来化学療法室が稼働し、エビデンスに基づいた治療レジメンが登録され、横断的なカンファレンスやカンファレンスが開かれるようになった。分子標的治療薬によりがん薬物療法の治療成績が向上し、治療適応の判断から副作用マネジメント、患者や家族の心のケアに至るまで、専門的な知識と豊富な経験を持つ専門家（プロフェッショナル）の存在はもはや不可欠になっている。薬剤師の職域は日々の処方監査と疑義照会からはじまり、服薬指導、抗がん薬の調剤、レジメンの管理へと広がった。さらに診療現場やカンファレンスでは医師や他職種と意見を交えながらチーム医療に積極的に参加する薬剤師も増えてきた。

一方で、がん薬物療法という共通の目的のために多職種がそれぞれの専門性を発揮するのがチーム医療の本質であり、ただ役割分担を決めて作業すればよいというものではない。評者は常日ごろより、薬剤師の方々は薬剤の適正使用から科学的な整合

性の吟味、臓器障害や併存症を持つ患者の用量や薬剤選択、薬物相互作用の可能性など他職種とは異なる独自の視点を大切にして欲しいと思っている。刻々と変化するがん薬物療法を取り巻く状況を踏まえると、このたび本書が上梓されたのは時流なのであろうか。

本書は乳がん、肺がんなど臓器ごとの各章から構成されており、それぞれの代表的な標準レジメンについてその内容から、処方監査のポイント、減量・中止基準、調剤のノウハウ、投与時の注意点、副作用マネジメントまで、多くの表を用いてよくまとめられている。しかし、ここまでの内容であれば、既に優れた類書も多い中、本書には比較的よくできたマニュアル本としての価値しかなかったかもしれない。

特筆すべき点は、やはり各項目の末尾に設けられた「薬学的ケアのポイント」であろう。それぞれのレジメンによる治療を受けた“CASE”について、担当の薬剤師がそのとき

何を考えてどう行動したか、型にはまったマニュアルでもDI情報でもない一人一人の薬剤師自身の生の声をそこに聞くことができる。医師でも看護師でもないまさに薬剤師としての視点である。したがって、本書は決して一時の流行に乗ったものではなく、本書を通して私たちは近未来のチーム医療の中で薬剤師が果たす大きな可能性を垣間見ることができるのである。これは高名なレビューアーでも医師でもなく、臨床現場で日々がん患者と向き合って悪戦苦闘している中堅から若手の薬剤師の方々に執筆の機会が与えられた幸運によるものであり、本書をそのように企画され監修された濱敏弘先生に深く敬意を表したい。

●B6変/頁 368/2012年/定価 3,990円
(本体 3,800円+税5%)

[ISBN978-4-260-01637-7]

医学書院 刊